

研究

親子関係の調整からみた早期の育児および発達支援

—「抱っこ」のぎこちなさに焦点をあてて—

土谷 みち子

〔論文要旨〕

親子双方への支援の可能性を探る目的から、親子の関係性を表す姿として「抱っこ」を取り上げ、保育所調査と「抱っこ」のぎこちなさについて4年間の追跡事例から考察した。

保育者の「抱っこ」実感は、母親の感じているわが子の扱いの難しさと相関がみられた。保育者は乳児期から親の感じるわが子の育てにくさを共に実感し、寄り添える可能性が示唆された。また事例は社会性の成長懸念や発達障害の行動特徴を示したが、臨床的な保育対応で成長や回復もみられた。しかし保育現場の困惑も深かった。親と子双方への支援には、親子の関係性支援も視野にいれ、早期から援助の必要性を予感している保育者や医療従事者、また療育関係者の連携が必要である。

Key words : 抱っこ, 早期発達支援, 子育て支援, 親子関係, 保育臨床

I. はじめに

近年の家族や地域など子どもの養育環境の変化は著しく、子どもの心身の成長や親の子育ての困難さについて懸念する声は多い。「健やか親子21」の計画にも見られるように、子どもの心身の健康の向上に貢献してきた乳幼児健康診査（以下健診）も、疾病の予防・発見から健康指向型の健診へと、その方向性に変化がみられる¹⁾。松本²⁾は近年の子どもの心の問題について憂慮し、健診の場で乳児期の基本的信頼感の獲得と愛着行動の大切さ、また幼児期の生活習慣や家庭機能の向上について、親と話し合うことを提案している。

また1999年に実施された保育者調査では、保育者は近年の子どもの成長発達に懸念を感じていたが、それ以上に親の自信のない養育行動に

より強い危惧をもっていた³⁾。子どもの対応に苦慮し振り回されている母親の姿は、親子のコミュニケーションのずれとして捉えられ、保育者の援助行為は、親子関係形成に心配を感じることに相関が見られた。

このように後の成長に影響の大きい乳幼児期の発達を支えるためには、親への援助も欠かせない。しかし、子どもへの接触体験や子育ての観察学習体験も乏しい現代の親世代は、言語発達の不十分な乳幼児との関わりに戸惑うことが多い。

本稿では、親と子双方への支援の可能性を探る目的から、親子の関係性を表す姿として「抱っこ」を取り上げ、保育所0・1歳児クラスに行った調査から考察する。軽度のストレス時である健診の際に、母子の社会的相互作用が活性化されることから開発されたMassie-Campbell尺度

Early Support for Childcare and Development from the viewpoint of Regulating
Parent-infant Relationship : Focusing on Infants who Show Difficulties on Being Held by
Mothers and Child-care Workers

Michiko TSUCHIYA

東横学園女子短期大学 保育学科（臨床発達心理士・研究職）

別刷請求先：土谷みち子 東横学園女子短期大学保育学科 〒158-8586 東京都世田谷区等々力8-9-18

Tel : 03-3702-0111 Fax : 03-5758-7245

[1603]

受付 04. 1. 8

採用 04.10. 4

(Mother-Infant Attachment Indicators During Stress: AIDS 尺度1983)⁴⁾では、〈注視・抱っこ・発声・接触・感情・接近度〉の6つの基本的な愛着様式が観察される。本稿ではMassie-Campbell 尺度において「乳幼児と母親が相互に応じ合っている姿勢」と定義され、より相互性が捉えられる「抱っこ」から、子どもの健康な成長発達と親の養育と両者の支援の可能性を探っていく。併せて「抱っこ」にぎこちなさが指摘された2事例について、保育所の4年間に及ぶ追跡結果も報告する。

II. 対象と方法

保育所で乳児期早期から子どもと関わる保育者は、乳児にとって両親と同様に愛着の対象となり得る。また、保育者—子ども相互関係形成が親—子ども関係の改善に影響を与える報告も見られ⁵⁾、保育者—子ども関係における抱っこの実態を探ることは、親と子双方に対する支援を考える際にも意義があると思われる。そこで今回は、保育者に一人ひとりの子どもを「抱っこ」した実感や子どもの行動様態を回答依頼し、ぎこちなさを指摘された群について考察をすすめる。

1. 第一次調査 (保育者の実感調査)

1999年1～3月実施。対象は全国の保育所98園に在籍する0・1歳児980名(東京都内49園490名, 他府県49園490名)について、各担当保育者(20代から50代まで分布)に郵送法によるアンケート調査を行った。回収率82.2%(839名)。乳幼児は2か月～22か月(男児464名・女児375名)で、核家族率は85.6%。一人ひとりについて担当保育者に抱っこの実感、出産前後の発育の心配、また自由回答で児の集団での行動特徴について記載を依頼した。抱っこの実感項目は、保育者の観察から作成した。各項目(図1・2に示す)は4件法で回答依頼し、4点～1点に得点化し、合計得点の平均値を分析に使用した。

2. 第二次調査 (母親の育児意識調査)

1999年8月に実施。一次調査園とは異なり、協力の承諾を得た東京都近郊の保育所15園において、対象は園の0・1歳児クラスに在籍する

152名の乳幼児1か月～23か月(男児74・女児78, 第一子69名)の母親(平均年齢は30.6歳)である。核家族率は70.5%。

母親には出産前後の育児意識や育児用品の使用頻度、子どものからだの特徴について郵送法により回答依頼した。項目は、保育者の観察から得た項目と母親の育児ストレスや子どもの特徴に関係する先行研究⁶⁾⁷⁾を参考に作成した。また保育者には、一次調査用紙で該当児の抱っこの実感を調査し、母親調査との照合を依頼した。

本稿では第二次調査で月齢4か月以上(乳児が相手に自発的な働きかけが可能である頸定段階以上⁸⁾)で欠損値のないデータ計146名(男児72・女児74)を中心に分析を行った。

3. 追跡事例について

第一次調査において、保育者から「抱っこ」の実感・様態項目ともに高得点を有し、ぎこちなさを指摘された児5名について、年1～2回保育所を訪問し、担当保育者と園長への面接および児の集団における参加観察を行った。本稿では4年間の定点観察が可能であった2事例(男児1・女児1)を報告する。

III. 結 果

第一次調査では出産前後のトラブルについて80名に若干記載がみられたが、調査時に健診および保育観察でも障害は確認されない児とされ、そのまま分析に使用した。

1. 保育者の「抱っこ」の実感について (第一次調査)

第一次調査では、全国の保育者がいづく乳児の抱っこの実感について、包括的に考察することを目的にした。保育者が児を「抱っこ」したとき、1) 違和感があるか(実感)、2) 児に行動の特徴があるか(様態)、について、4件法の回答結果を図1・図2に示した。

実感項目では「抱いてもフィットしない」が最も回答が多かったが、項目全体では乳幼児の20%前後に「抱っこ」にぎこちなさを実感していた。また様態項目では、項目によってばらつきが見られるが、最も多い様態は「手や足を相手にまわさない」姿が32%の乳幼児に見られ、

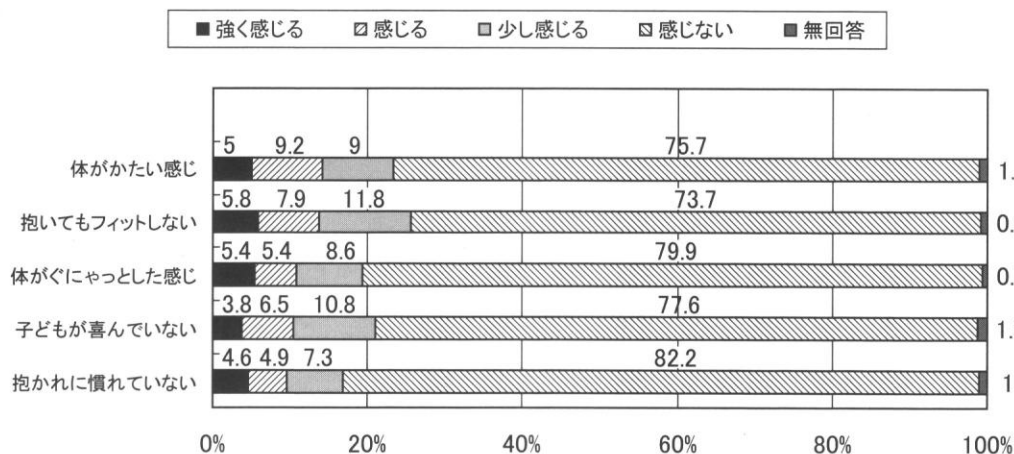


図1 保育者「抱っこ」の実感

(保育者回答N=839)

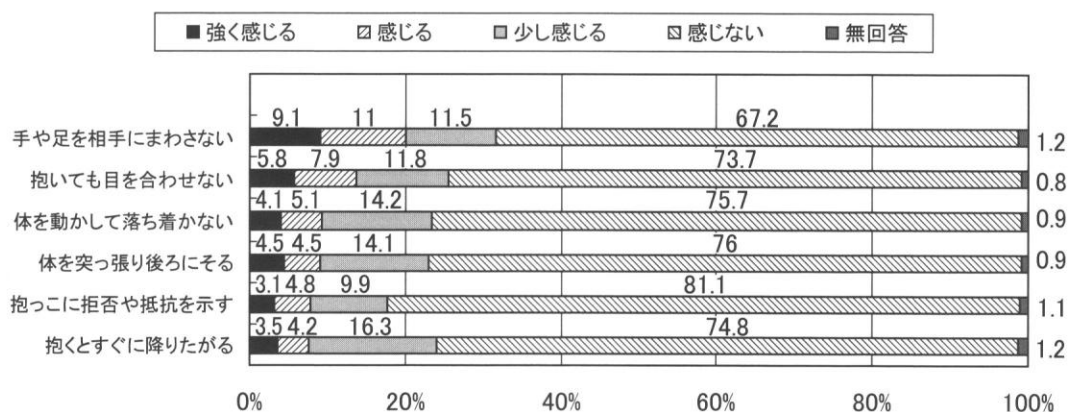


図2 子どもの「抱っこ」の様態

(保育者回答N=839)

「抱いても目を合わせない」乳幼児も上位2段階でも13.7%とやや多かった。抱っこに「体を突っ張り」「拒否や抵抗」を強く示す姿や、「落ち着かない」「抱くとすぐに降りたがる」など消極的な拒否の姿も全体の20%前後みられ、特に「強く感じる」「感じる」子どもは全体の8～9%と共通していた。

2. 保育者が感じる「抱っこ」のぎこちない子どもとその親の特徴(第一次調査自由回答)

「実感項目」は保育者の主観的な感情も反映される可能性が高いと考え、「抱っこ」時の行動特徴を表わす項目として妥当性が高い「様態項目」の得点を取り上げ、自由回答を整理した。「抱っこ」様態項目の合計得点が平均よりプラ

ス1SD高い上位97名(抱っこ一群)について、
1) 園での遊びや生活で気になる本児の様子、
2) 親または主たる養育者の抱き方や子どもへの接し方で気になること、について自由回答を求めた。「子どもの様子」については、回答率63.9%で112件の行動特徴が抽出された。また「養育者の様子」については、回答率38.1%で37件の養育特徴が抽出された(図3)。

1) 子どもの様子について、津守・稲毛乳幼児精神発達診断法⁹⁾(以下津守式)に倣い、抽出された内容を発達領域ごとに整理して主な内容を記述したものが図3-①である。保育者が指摘する「抱っこ」にぎこちなさのある子どもの集団での行動特徴は、「社会性」領域に集中(61件で全体回答の54.5%)してい

た。そして内容も自由記述であるにもかかわらず、他の領域より重複した行動特徴が記述されていた。保育者は「抱っこ」にぎこちなさを感じている乳幼児について、対人的な社会性領域の成長に心配を感じていた。

2) 養育者の様子については(図3-②), 回答率の低さもあるが保育者は, 「抱っこ」のぎこちない児について, その一部の家庭について親子の相互作用不足や親の養育方法の未熟さが気になっていた。

3. 保育者の「抱っこ」の実感と母親の育児意識との関連性 (二次調査)

3-1 「抱っこ」のぎこちなさと児の属性について

一次調査同様, 「抱っこ」のぎこちなさについて様態項目を取り上げて比較した。様態項目の内的一貫性が高い($\alpha=0.862$)ことを確認し(表3), 合計の平均値に1SDをプラスし, ぎこちなさが際立つ群を様態H群(26人), またぎこちなさの指摘がすべて最低得点のL群(69人)と高低群に分けて, 児の属性を表1に比較した。抱っこのぎこちなさは性別・出生順位・家族形態・子どもの月齢・父母の年齢, すべての項目で有意な差はみられなかった。

3-2 母親の育児意識に関する項目の因子分析結果

二次調査においては, 母親に育児用品の使用頻度や育児意識について解答を依頼した。育児用品(おんぶひも・抱っこベルト・迷子用ひ

①子どもに「気になること」(112件, 回答率63.9%) * ()は複数件数の数

	主 な 記 述	10	30	50	70件
運動 (20件)	・筋力不足が目立つ・体がかしい ・動きが鈍い・ころびやすい	<div></div>	<div></div>		
探索・操作 (21件)	・意思のだし方が弱い・初めてのことに慣れにくい ・意欲にかけろ・遊具に関心を示さない	<div></div>	<div></div>		
社会性 (61件)	・話しかけても眼があわない(10)・表情が乏しい(3) ・笑顔がみられない(2)・他児に関わられることを嫌がる(2)	<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>
生活習慣 (7件)	・離乳食に抵抗が強い・食事をががつと食べる ・指しゃぶりが激しい・マスターベーションが見られる	<div></div>			
理解・言語 (3件)	・発声や発語が少ない(2)・言葉が乱暴	<div></div>			

②養育者に「気になること」(37件, 回答率38.1%)

	主 な 記 述	10	20件
親子の相互作用不足 (17件)	・子どもが要求するときに抱いたり関わるのが少ない ・子どもへのことばかけが少ない	<div></div>	<div></div>
養育方法の未熟さ (16件)	・子どもがしがみつく抱き方をしない ・授乳時に抱っこをしない・いけないことを叱れない	<div></div>	<div></div>
養育への戸惑い (4件)	・母親の表情が豊かではない ・子どもが泣き出すとどうしてよいかわからない様子だ	<div></div>	<div></div>

図3 園生活の中で気になる様子(保育者の自由回答)―抱っこマイナス群97名から―

表1 「抱っこ様態」H-L群における属性

抱っこ 様態	性 別		出生順位		家族形態		子どもの 平均月齢	父親の 平均年齢	母親の 平均年齢
	男児	女児	第一子	第二子 以降	核家族	その他			
High 群 (N=26人)	16 (61.5%)	10 (38.5%)	12 (46.2%)	14 (53.8%)	19 (73.1%)	7 (26.9%)	13.3 (SD3.01)	32.8 (SD7.50)	31.1 (SD4.62)
Low 群 (N=69人)	30 (43.5%)	39 (56.5%)	27 (39.1%)	42 (60.9%)	40 (58%)	29 (42%)	12.8 (SD3.51)	32.7 (SD5.28)	30.5 (SD4.32)

*有意差なし

も・キャリー籠・ベビーカー・歩行器)の使用頻度と保育者の「抱っこ」実感項目と様態項目には、いずれも関連が見られなかった。

母親の育児意識には、母親の感じる子どものからだの特徴(5項目)、出産前後の感情(10項目)を含み計35項目について、主成分分析、バリマックス回転による因子分析を実施した(表2)。その結果、6因子解が適当であると判断した。最終項目数は30項目、累積説明率は48.14%となった。それぞれの因子は第1因子

「からだの特徴」第2因子「子育ての不安」第3因子「子育ての負担」第4因子「関係性志向」第5因子「出産前後の肯定感情」第6因子「夫の育児協力」と命名した。

3-3 保育者の感じる「抱っこ」のぎこちなさと母親の育児意識との関連

表3には、保育者の「抱っこ」実感項目と様態項目、および因子分析で得られた母親の育児意識に関する各尺度について、平均値と標準偏差および内の一貫性を示す α 係数を示した。次

表2 母親の育児意識に関する項目の因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

項 目	因子負荷量
(第1因子：からだの特徴)	
43. あまり寝ない赤ちゃんだった	0.792
45. いつも手足に力が入っているような赤ちゃんだった	0.760
44. とても神経質な赤ちゃんだった	0.747
41. 泣き方が激しく、長く続いた	0.658
42. 体が筋肉質のように硬かった	0.471
(第2因子：子育ての不安)	
23. 私が親になれるのかどうか不安だった	0.712
35. ぐずって泣く時など、上手く抱っこができず不安だった	0.683
34. どうして泣いているのかわからず不安だった	0.659
15. わが子に嫌われないかと不安になる	0.610
25. 私(女性)だけが大変になるのではないかと不安だった	0.494
10. 将来わが子がちゃんと育つか不安になる	0.385
(第3因子：子育ての負担)	
18. できるだけ早く育児から解放されたい	0.672
19. 子どもがおとなしくしていると、かわいく感じる	0.619
17. 子どもに時間をとられすぎるとついイライラする	0.618
6. 忙しいと子どもをあやす時に足も便利だと思った	0.584
1. 夜起こされると辛い	0.423
(第4因子：関係性志向)	
9. 子どもが甘えてくると嬉しくてたまらない	0.686
16. なるべく多くの時間、抱っこしたり触ってあげたい	0.681
12. 抱き癖がつくので、必要なとき以外抱かない(一)	0.647
13. 子どものレベルで一緒に遊ぶことが苦にならない	0.604
14. 抱っこやおんぶは肩や腰が痛くなるので辛い(一)	0.455
(第5因子：出産前後の肯定感情)	
21. ほしくてたまらない気持ちで子どもを産んだ	0.585
24. 早く生まれてこないか出産が待ち遠しかった	0.522
33. 生まれた直後が、一番かわいいと感じた	0.522
4. 寝顔を見ていると疲れが吹っ飛ぶ	0.512
3. 離乳食はきっちり作って食べさせたい(一)	0.458
31. 授乳する時、幸せを感じた	0.451
(第6因子：夫の育児協力)	
2. 夫が実際に育児に協力してくれて助かる	0.871
11. 夫が精神的に私を支えてくれていると感じる	0.795
20. 夫にもっと子どもに関心を向けてほしい(一)	0.450
累積説明率(%)	48.14

に表4に各尺度の相関を求め、関連性を探った。

- 1) 保育者が一人ひとりの児に感じた「抱っこ」実感と、母親がわが子に感じた「からだの特徴」に関連性が見られた。また保育者の抱っこ実感項目は様態項目と関連性が高かった。
- 2) 児の「からだの特徴」は、母親の子育ての不安や負担と関連し、特に子育て不安との関連性は高かった。
- 3) 「子育て不安」は子育て負担とも関連し、一方わが子との関係性を志向する行動や出産前後を肯定する感情とはマイナスの相関を示した。また「子育ての負担」も、関係性志向や出産前後の肯定感情とマイナスに関連し、夫の育児協力ともマイナスに関連した。

表3 各尺度の平均値(標準偏差)と信頼性(N=146)
(クロンバックの α 係数)

尺 度	Mean(SD)	α 係数
(保育者の実感)		
抱っこ実感	1.48(0.79)	0.7985
抱っこ様態	1.41(0.65)	0.8621
(母親の育児意識)		
子・からだの特徴	1.76(0.67)	0.7654
子育ての不安	2.18(0.71)	0.7382
子育ての負担	2.32(0.71)	0.6207
関係志向性	1.84(0.57)	0.6490
出産前後の肯定感情	1.83(0.51)	0.5409
夫の育児協力	2.13(0.88)	0.6306

4. 0歳時期に「抱っこ」にぎこちなさが見られた児の保育所での行動の変化(追跡事例の検討)

4-1 行動観察と保育記録から(表5)

事例AとBは、一次調査の保育者の実感調査において、「抱っこ」にぎこちなさを指摘された児の4年間に及ぶ追跡報告である。表5に年1回の定点観察の様子や保育者や園長からの報告をもとに、児の保育所での成長の経過をまとめた。

i) 事例A(男児)の成長プロセスについて

Aは母子2人の家庭で育ち、現在は3人の核家族で過ごす。保育所に生後3か月で入所し、保育者はその直後から「抱っこ」にぎこちなさを実感していた。一次調査(1歳2か月時実施)での「抱っこ」実感得点は3.4、「抱っこ」様態得点は3.7と極めて高い児であった。

抱っこをした際の体のそり返りは強く、機嫌の悪さも際立った。児に特徴的なことは、哺乳を含む食事への強い抵抗であったが、2歳時に子育て経験のある担任が担当して変化が生じた。食事場面における児の寝る・目を閉じる・食べ物を落とす・担任を噛むなど様々な抵抗に、担任は真正面から児と向き合い、叱る・誉める・モデルを示す・なだめる・抱くなど多様

表4 保育者の「抱っこ」の実感と母親の育児意識との関連

	(保育者の実感)		(母親の育児意識)					
	抱っこ 実感	抱っこ 様態	子・から だの特徴	子育て の不安	子育て の負担	関係志 向性	出産前後 の感情	夫の育 児協力
(保育者の実感)								
抱っこ実感	1.00							
抱っこ様態	0.829 **	1.00						
(母親の育児意識)								
子・からだの特徴	0.168 *	0.118 ns	1.00					
子育ての不安	0.109 ns	0.110 ns	0.325 **	1.00				
子育ての負担	0.100 ns	0.023 ns	0.182 *	0.373 **	1.00			
関係志向性	0.010 ns	0.001 ns	-0.159 ns	-0.220 **	-0.254 **	1.00		
出産前後の肯定感情	-0.087 ns	-0.117 ns	0.101 ns	-0.227 **	-0.216 *	0.209 *	1.00	
夫の育児協力	0.028 ns	-0.049 ns	0.021 ns	-0.148 ns	-0.224 **	-0.150 ns	0.028 ns	1.00

*: $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

表5 「抱っこ」のぎこちなさを指摘された事例の追跡報告

	担任	事例A (男児)	担任	事例B (女児)
入所時月齢		3 か月		7 か月
家族		母親と本児 2 人		父親・母親・姉・本児の 4 人
出産時の状況		満期出産。妊娠 9 か月時に母親が軽度の妊娠中毒症で 1 週間入院。		低出生体重児で NICU に数日入り授乳できず。退院後は、特に心配なし。
障害 (1 歳時点)		なし		なし
「抱っこ」実感得点		3.4		3.4
「抱っこ」様態得点		3.7		3.5
入所時の姿		抱いても暴れてそり返って泣く。機嫌のよい時がほとんどなく、哺乳瓶を受けつけず、スプーンのミルクも飲まない。		抱くと体をつっ張らせて後ろにそり返る。座らせても泣き、うつぶせを好む。人に慣れず、眠りも浅く、ミルクは 1 週間後に飲む。
保育者の対応		保育者が 1 対 1 で対応し、抱っこのし方や状況を変化させて、気持ちの安定を図った。母親の迎えを待ってミルクを飲ませた。		保育者が 1 対 1 で対応し、当初後ろ抱きを多くし児の手足を保育者の体に回す、眼を合わせてから話す等、身体的関わりを意識した。
0 歳時期の姿	↑	<ul style="list-style-type: none"> 母親が保育者とコミュニケーションがとれるようになると、児も徐々に園で安定してくる。 ミルクを飲むようになる (数か月経過)。 感情の起伏が激しく、泣くことが多い。 抱く、なだめる等対応しても気分転換しない。 	↑	<ul style="list-style-type: none"> 無表情のことが多く、笑顔も少なかった。 何かに興味をもって自分から近づくことがほとんどない。泣いて訴えることが多い。 離乳食の好き嫌いが多く、咀嚼が不十分。好きなものと慣れない物を組み合わせた。
1 歳時期の姿		<ul style="list-style-type: none"> クラスで安定する時もでてきたが、気にいらなことがあると、かんしゃくが強い。 食事に強い拒否がある。同じ保育者が対応しゆっくりと話しながら食べる援助をする。 保育者に甘えてこない。 	↓	<ul style="list-style-type: none"> 1 歳を過ぎて、児から自然に保育者の体に手足を回して抱かれるようになった。 担任と園長に抱っこの要求をするようになる。 担任の膝に他児が座ると自分も近づく。 食事は量は少ないがよく食べるようになる。
2 歳時期の姿	↑	<ul style="list-style-type: none"> 苦手な事・嫌な事に対するかんしゃくが強い。 食事への抵抗は続き、床に寝る・眼をつぶる等、巧妙な行動になる。新しい担任が担当し、食べさせたり、叱ったり、誉めたりと様々な関わり方をする。気分転換は他のスタッフもする。 終わり頃に、担任に甘えるようになる。 	↑	<ul style="list-style-type: none"> 他の子どもの遊びに無関心で、話しかけられても表情を変えずに無言である。 大人の話しかけには応答するが、自分からは、担任、園長、元担任以外は近づくかない。 言語は 1 歳半健診で要観察児とされたが、2 歳半すぎに言葉がふえてくる。
3 歳時期の姿	↓	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の節目で行動を変化させることが難しく、制止されるとかんしゃくを激しくおこす。 食事は同じ担任が担当し、食べさせると食べるようになる。他児から「赤ちゃんみたい」と声がでる。量を加減しながら、一人で食べることを促すと、言葉で「減らして」等要求をする。 担任との信頼関係ができて要求も多くなる。 	↑	<ul style="list-style-type: none"> 一人遊びが多く、自分の遊具に他児が近づくと、体で覆う。物のやり取りは困難である。 担任にストレートに甘えて抱きついてくる。 特定の女児を好きになり、名前を呼んで近づくことが多くなる。家でもその子の話が多い。 担任が結婚し退職。他クラスの保育者が担任となり、4 歳児クラスも担当する。
4 歳時期の姿	↑	<ul style="list-style-type: none"> 食事をよく食べるようになり安定する。 他児と同じ場で遊ぶこともでてくるが、他児の行動やつもりを共有することは乏しい。 几帳面なところもでてきて、遊具の整理もよくしている。 かんしゃくの回数は減っているものの、自分でコントロールできず、いろいろな保育者がかわっている。(場面を変化させても困難) 	↓	<ul style="list-style-type: none"> ままごと等ごっこ遊びが多くなり、見立てやつもり遊びが見られる。他児ともやり取りがスムーズになる。家でも母親と遊ぶようになる。 他児と笑い合う姿が多く見られるようになる。 替わった担任の背中に飛びついてくる。 自分からいろいろな他児に関わりをもち、運動遊びやごっこ遊びなど、遊びにも広がりが見られるようになる。
保育者からみた家族の様子		<ul style="list-style-type: none"> 入所時は母子ともに不安定だったが、母親は育てにくい児をよく抱っこしていた。児は母親の迎えを喜び、背中に抱きついたり、物をねだったり、わがママを言って激しく甘えていた。 3 年後の母親の結婚で児も安定している。 		<ul style="list-style-type: none"> 父子関係は安定して、児も迎えに飛びつくが、母子関係はやや不安定で、児から母親に近づくことは少ない。母親はベビーカーを多用し、気候に関わりなく児の上に厚い布をかぶせ、児は無表情で乗って通所していた。
(母親調査から)		(1 歳 7 か月時実施)		(2 歳 7 か月時実施)
子・体の特徴		3.4 ↑		1.0 ↓
子育ての不安		2.5		1.3 ↓
子育ての負担		2.6		2.4
関係性志向		2.8 ↑		3.0 ↑
出産前後の肯定感情		3.2 ↑		2.6 ↑
夫の育児協力		2.0		4.0 ↑
		(* 平均値 + 1 SD より高値 ↑ 低値 ↓)		

な方略で応じている。担任は『あらゆる手で、自分の子どもの時よりも関わりました』と述べたが、その1年後、児は担任を「たいしょう」と呼ぶようになり、食事の1対1の援助は2年間に及んだ。

4歳児クラスで担任の交替があった。参与観察では、児は自由遊び場面で他児と楽しく遊ぶ姿も見られたが、イメージを共有する姿は乏しかった。保育者への面接では児の感情の起伏が激しいことが報告され、所内では児の行動や感情のコントロールへの対応に苦慮が続いていた。

母親の育児意識調査から

1歳7か月時に実施したが、母親は乳児期から児のからだの特徴を高得点で回答していた。長泣き・体の硬さ・寝ない・神経質・手足に力という特徴のある児は、母親に出産前後の肯定感情が高く、関係を志向する気持ちがあっても、いわゆる「扱いの難しさ」を感じさせた。母親は乳児期から保育者に細かく相談し、抱いても泣きやまなかったわが子への子育ての不安を訴え続けた。

ii) 事例B(女児)の成長プロセスについて

Bは同じ保育所に在籍した、小学生の姉がいる4人家族で育つ。複数の保育者はBの入所直後、姉が在園時に示した抱っこ様態に似ていることに大変驚く。保育者が抱くと体をつっ張らせて後ろにそり返る姿である。Bは一次調査(1歳3か月時実施)で、「抱っこ」実感得点3.4、「抱っこ」様態得点3.5と高得点を有した。

保育者は遺伝的要因も感じていたが、父子関係は安定しているものの、母親が児と眼をあわせて話しかけない、抱いている姿を見ない、児が母親の後追いをほとんどしない等の姿から、母親との信頼関係が十分に形成されていないことも感じていた。母子の情緒的な交流が乏しいことに支援の仮説をおき、まず担任と児との関係形成を身体接触から試みた。5か月後(1歳時)に、担任に自ら手足を回して抱かれ、抱っこの要求は1歳半過ぎに見られた。担任との信頼関係が形成されると、言葉も増え食事もスムーズになった。

2歳児クラスで担任が替わったが、所内にいる前担任に接触して笑顔を見せながら、半年後

に現担任にも甘えてきた。社会性の変化が著しいのは、4歳時に特定の女児に好意をもち模倣行動をするようになってからである。遊びに広がりが見られ、仲間とのイメージを共有する遊びを好むようになった。それは家庭でも母親を巻き込むままごとなど、やりとり遊びに発展している。この頃母親は、「うちで一番おしゃべりで威張るようになった」と笑顔で児の成長を話していた。

母親の育児意識調査から

2歳7か月時に実施したが、児のからだの特徴は特筆するものがなくすべて最低得点であった。また母親の育児不安項目は低得点で、児への出産前後の肯定感情は高く、乳児期からの関係性志向も高得点であった。特に父親の育児協力は高く、保育者の観察でもそれは支持されていた。

4-2 津守式発達検査の実施から(図4)

事例Aについては5歳3か月時(63か月)、事例Bについては4歳8か月時(56か月)に、保育所内で観察者(筆者)と担任および園長で津守式発達診断法¹⁰⁾を実施した。

Aには乳児期から気質的な難しさが見られたが、母親が感じているに留まり、1歳6か月時と3歳時の乳幼児健診では特に指導や助言は得ていない。5歳3か月時点では、理解・言語領域の発達は著しいが運動領域や社会性の発達の落ち込みがみられ、全体の成長のバランスを崩していた。社会性の遅れは特筆されよう。これらのことから3~4歳以降に診断が可能となるアスペルガー症候群などの発達障害が疑われるが、今回はテストバッテリーも組んでいないため明言は避け、園には療育相談機関との連携をすすめた。

Bに関しては、児の姉と行動特徴が似ていることや、1歳6か月健診後に保健所(当時)から「ことば遅れ」について訪問指導を受けたことから、保育者は入所時からいわゆるグレーゾーンに位置する児と捉え、早期からの発達支援を行った。所全体で児には丁寧な言葉かけや対応をしている。4歳8か月に実施した発達診断では、確実な行動評定項目がやや少ないものの全体のバランスはよく、今後の成長が期待される。1歳~2歳時に観察された言語領域や社

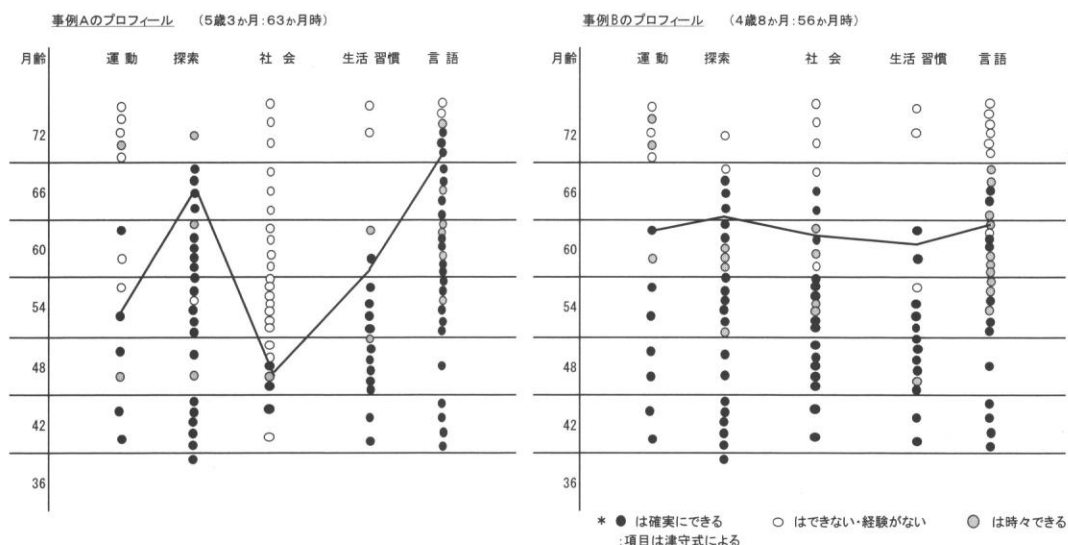


図4 事例の発達輪郭表

会性の発達の落ち込みが、4歳以降急激に成長していた。

IV. 考 察

保育者の「抱っこ」実感と母親の感じたわが子の「からだの特徴」との関連性

保育者—子ども関係で感じた「抱っこ」の実感は、母親—子ども関係で感じた「からだの特徴」と関連が認められた。保育者の主観が大きいと考えられた「実感」は、児の行動の「様態」よりも、母親の感じているわが子の特徴を推測する可能性がみられた。今回調査で使用した「からだの特徴」項目は、寝ない・手足に力・神経質・長泣き・からだの硬さといった乳児の特徴で、いわば扱いの難しい Difficult child の気質的な特徴の一部ともいえる。母親は産褥期に、子どもとの近接・接触による強い快感情体験をすることで、母性行動を生じさせ、それが母子関係を形成する基底にあると指摘される¹¹⁾。児に近接・接触しにくいからだの特徴や扱いの難しさがあった場合は、早期から親子関係形成に困難を生じることが事例Aからも推測される。

本調査結果でも「からだの特徴」は、母親の「子育ての不安」や「子育ての負担」との関連性が高く、また出産前後の快感情や関係を志向

する傾向ともマイナス相関を示し、内部相関が高かった。夫の育児協力も先行研究同様母親をサポートする可能性もみられたが、母親の子育ての不安や負担が定着する前に、母親の出産前後の肯定感情を高め、児の扱いの難しさに配慮した支援が、親と子の関係性を安定させることに必要と考えられる。

また事例Bに見られたように、保育者から丁寧に身体接触到配慮したアプローチを行うと、児の接触忌避傾向が緩和される可能性もある。親子の身体間の交流の困難さについては、室内で長時間子どもが一人でビデオ視聴を繰り返している症例からも、前言語期の子どもとの付き合い方に戸惑う親の特性が語られている¹²⁾。近年その効果が報告されるタッチケア¹³⁾等を、早期の親子関係支援に積極的に導入することが期待される。

保育施設での子どもの発達支援(臨床保育)の可能性

乳幼児期初期には障害が認められない事例でも、3歳～7歳ごろに診断が可能になる自閉性障害や学習障害、また近年注目されているADHDなどの発達障害が現れる可能性がある¹⁴⁾¹⁵⁾。しかし保育や育児現場では、その理解がまだ十分とはいえない。特に広汎性発達障害に位置するアスペルガー症候群は、言語発達や

知的発達遅れを伴わず社会性の発達に困難を示すことから、子どもと直接対応している保育者や親が保育や養育方法に苦慮し、責任を感じて自信を喪失させていることが多い。今回取り上げた「抱っこ」のぎこちなさも、児の成長のプロセスを見ながら、環境的な初期経験の有無によるものか、親子関係形成不全か、また生得的な中枢神経系の機能不全があると考えられるかを見極めることが必要になる。

4年間に及ぶ追跡事例は、家庭や園の事情で2事例に留まったが、事例AとBはそれぞれ異なった成長のプロセスをたどり示唆に富む。発達障害が疑われる児には食行動の困難さも指摘されるが、事例Aは関係形成に効力のある食事場面¹⁶⁾のやりとりから、児に保育者との信頼関係が成立し、その後園での行動の安定や他児との関係の拡大につながったと思われる。Aには発達障害が疑われるが、今後園と専門機関との連携が必要である。

また事例Bは、0・1歳時の担任と身体接触から情緒的な交流が活発にされて、保育者が愛着の対象と成り得たと考えられる。その関係を基に他保育者や他児にも愛着が汎化し、母親との関係修復も見られて、園での社会性の発達が急速に成長を遂げたと思われる。

乳児期早期の「抱っこ」のぎこちなさから、将来の発達障害を断定することは困難を極めるが、集団のダイナミックな関係性に依拠しながら、一人ひとりの児に対して丁寧な発達支援を含む臨床的な保育が必要と思われる。しかし、養育者や保育者が自身の養育方法に責任を感じ、自らを責めないよう、21世紀型のヘルスプロモーションの考え方を浸透させ、子どもの成長を親と地域の人々や専門家など大人の連携で支える体制を整える必要がある。さらに今後は保育現場へのコンサルテーションも必要で、保育者と医学従事者や他の専門療育機関との連携も求められよう。

乳児期早期からの親子関係支援の必要性

愛着の形成される乳幼児期初期の親子関係については、不安定な関係を「関係性障害」と捉え、乳児期早期からの援助の必要性が訴えられている¹⁷⁾。発達初期の愛着の安定性は、その後

の子どもの人格発達に影響すると考えられ¹⁸⁾、子どもの探索行動や社会性、また自己感を高めると指摘される¹⁹⁾²⁰⁾。また、近年日本の親子関係でも安定性のある愛着型は成人しても継承される可能性を示唆する研究も見られる²¹⁾。

このように、子どもの心身の発達を支援する際に早期の親子関係を把握することは、大きな意味があると考えられる。そして、数パーセントの重篤な精神疾患病理が固定化することを防ぐ意味からだけではなく、前言語期の子どもの対応に苦慮する養育者への子育て支援からも、また昨今の子どものソーシャルスキルに関わる問題の深刻さを考えても、関係性支援に対する早期の予防的介入の必要性は増しているといえよう。

榊原¹⁵⁾はアタッチメントが社会性の発達のよいバロメーターであるとし、乳児健診や育児相談でその状態を把握していないことを指摘している。また先のMassie-Campbell尺度に、母子間の関係性の障害には生後2年間における早期の臨床的介入が必要であると記入されている。いずれにしても、子どもの発達スクリーニングや親の養育方法改善への指摘を目的とするのではなく、子どもの健やかな成長を支えるParentingとChild Careのドッキングによる養育者と専門家の人間システムによる子育て²²⁾を推進する意味でも、親子関係に配慮した乳児期早期からの支援システムの構築が早急に求められている。

V. ま と め

乳児期の「抱っこ」のぎこちなさから、親の子育てと子どもの発達支援に関して、早期の支援の必要性について考察した。

乳児期早期から、保育者は母親が感じているわが子の育てにくさや援助の必要性を予感していることが確かめられた。しかし、保育現場の苦悩も深かった。

子どもの発達支援は、保育者や医療従事者、また療育関係者のコラボレーションが必要であると考えられた。そして乳幼児の健診システムで、母親が児に感じている育てにくさにゆっくりと耳を傾けながら、早期の親子関係を把握する必要性があると思われた。

謝 辞

保育所の訪問に同行いただいた竹田真木さん、松永静子さん、分析の一部にご協力をいただいた坂上裕子さんにお礼申し上げます。そして、お忙しい時期に調査にご協力くださいました保育所の皆様、また長期間の観察と報告をお許しくださいました先生方と保育所のご好意に深く感謝致します。

本質問紙調査は、汐見稔幸・松永静子・吉葉研司との共同研究だが、本稿では筆者の責任において、再集計・再分析を行った。

なお本論文の一部は、第46回(北海道)・第47回(高知)日本小児保健学会にて発表した。

文 献

- 1) 健やか親子21検討会。健やか親子21検討会報告書—母子保健の2010年までの国民運動計画—。小児保健研究 2001; 1: 5-33.
- 2) 松本壽通。外来小児科医と乳幼児健診のこれから—21世紀のあるべき姿を求めて—。小児保健研究 2002; 2: 261-266.
- 3) 土谷みち子, 加藤邦子, 中野由美子他。幼児期の家庭教育への援助—保育者の捉える子育て支援の方向性—。保育学研究 2002; 40-1: 12-20.
- 4) J.D. Call, E. Galenson, R.L. Tyson editors Frontiers of infant psychiatry 1983 Basic Books (小此木啓吾監訳 慶応乳幼児精神医学研究グループ訳 乳幼児精神医学 岩崎学術出版社 1988): 390, 393-407.
- 5) 吉葉研司, 汐見稔幸, 土谷みち子他。乳児保育における「保育者—子ども相互関係形成」の重要性について—保育実践が「親—子ども」関係の改善に与える影響。日本保育学会第54回大会発表論文集 2001: 352-353.
- 6) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり他。育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連。心理学研究 1994; 64-6: 409-416.
- 7) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子他。育児不安に関する基礎的検討。日本総合愛育研究所紀要 1993; 30: 27-39.
- 8) 西條剛央, 根ヶ山光一。母子の「抱き」における母親の抱き方と乳幼児の「抱かれ行動」の発達—姿勢との関連を中心として 小児保健研究 2001; 1: 82-90.
- 9) 津守 真, 稲毛教子。(増補)乳幼児精神発達診断法0~3歳まで。東京: 大日本図書, 2002 (初版1961).
- 10) 津守 真, 磯部景子。乳幼児精神発達診断法3~7歳まで。東京: 大日本図書, 2002 (初版1965).
- 11) 川井 尚・大橋真理子・野尻恵他。母親の子どもへの結びつきに関する縦断的研究—妊娠期から幼児初期まで—。発達の心理学と医学1990; 1: 99-109.
- 12) 土谷みち子。子どもとメディア—乳児期早期からのテレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性—。国立女性教育会館紀要2001; 5: 35-46.
- 13) 齊藤和恵, 吉川ゆき子, 飯野孝一他。3か月児への6か月間のタッチケア施行の効果—健常児の発達と母親の育児感情の変化—。小児保健研究 2002; 2: 271-279.
- 14) 上野一彦。LDとADHD。講談社α新書2003 44-47, 72-78.
- 15) 榊原洋一。アスペルガー症候群と学習障害。講談社α新書。2003 44-47, 65, 72-78.
- 16) 根ヶ山光一。発達行動学の視座。金子書房 2002 49.
- 17) 田中千穂子。ひきこもりの家族関係。講談社α新書。2001. 9-50.
- 18) Bowlby, J.A secure base: Parent-child attachment and healthy human development. New York: Basic Books. 1988.
- 19) 遠藤利彦。愛着と発達 井上健司・久保ゆかり編。子どもの社会的発達。東京大学出版会 1997; 8-31.
- 20) Cassidy, J. Child-mother Attachment and the Self in Six-Year-Olds: Child Development, 1988; 59: 121-134.
- 21) 数井みゆき, 遠藤利彦, 田中亜希子他。日本人母子における愛着の世代間伝達。教育心理学研究 2000; 48: 323-332.
- 22) 前川喜平。21世紀は子どもの世紀—21世紀の小児保健を考える。小児保健研究2002; 2: 141-145.